

# 米山梅吉記念館 館報

2008  
(平成20年)

春

Vol. 11



米山記念館の敷地内に、二つの門がある。一つは、米山別邸にあったものを移築した門である。衡衡門と呼ばれていたと言われる。誰でもお気軽にお入り下さい、という意味があるらしい。長泉町の隣、沼津のお寺と記念館を行き来し、現在は今の位置に落ち着いている。

もう一つが、長屋門である。この門は、その昔、米山家が北条氏の家臣であったので、小田原を向いて作られているところから、東門とも呼ばれている。毎日この門の前を通る梅吉少年を、米山藤三郎が見初めた門であり、新しい世界に憧れて、梅吉が東京への第一歩を踏み出したのもこの門である。米山家、そして長泉の歴史をつぶさに見てきた証人でもある。昭和44年に記念館が出来てから新館ができるまで、お客様を迎える正門入り口になっていた。

残念なことに、この長屋門は道路拡張のため、その歴史に幕を下ろすことになった。またひとつ歴史が消えていくのは寂しいが、春になると門の周りに咲いた桜と共に、私たちの思い出の中で生き続けるだろう。



財団法人 米山梅吉記念館





## 内藤成雄理事長を悼む

岡山山梅吉記念館 顧問 坂本豊美  
(静岡東R.C.)

米山梅吉記念館理事長 内藤成雄さんが、去る2月7日逝去されました。謹んで哀悼の意を表し御冥福をお祈り申し上げます次第であります。

内藤さんは富士吉田ロータリークラブの会員で、1994-95年度国際ロータリー2620地区ガバナーに就任されました。

その頃、米山梅吉記念館新館建設のことが具体化し、当地区がガバナーとして協力をお願いしたところ、心よく賛同され、以来記念館建設に極めて積極的に支援をいただいたのであります。そしてガバナー退任後は、建設委員長として記念館の建設につくされたのであります。

幸い全国のロータリアンの協力、関係方面の御援助により新館を完成することができましたが、その間、陰に陽に臨んだ見識の高さに、心から敬意を表した次第であります。そして私の理事長退任後、第4代理事長に就任していただき、運営資金の充実に腐心し、地区ロータリーとの関係を密にし、新しい事業を展開し、記念館の存在を天下に広めたのであります。特にR1元会長ビチャイ・ラタクル氏を迎えたり、地元出身の文化勲章受章者の大岡信氏を招いて、創立35周年の記念行事を行うなど、数々の輝かしい行事を主催されたのであります。

一方、記念館の機関紙である館報を充実し、運営を軌道に乗せ、特に常務理事井口賢明さんの一大労作である『超我の人 米山梅吉の聲音』を出版されるなど多くの業績を残されました。

また館報に見られるように、米山翁の時代の雑誌や印刷物の中から、米山翁の伝記やロータリーの記事に新発見を加えるような発掘もなされているような感じがするのです。

毎年行われる春秋2回の記念行事も、知名人の講演のあと軽い音楽を聞いてささやかなパーティーを催し、米山翁を語りロータリーを論ずる会を企画されたのも、内藤さんの発想ではなかったでしょうか。この日を楽しみに来会者も年々多くなったような気がいたします。

内藤さんは、山梨県文化協会連合会会長を始め、数多くの役職につかれたのであります。文藝をよくし、郷土の歴史や文化の発展に活躍されました。私もいただいた歌集「花亭夷」「朱の唐」を通じて、豊かな情懐と強い意志と多様な発想の人であったと知るのであります。

ロータリーには『ロータリー日本50年史』という貴重本はありますが、昭和46年の発行で多くのロータリアンは入手困難な状況にあります。記念館では50年史に基づいて簡単な展示はしていますが、内藤さんは更にこれを充実し、記念館に來られれば、ロータリーの先達やその活動の様子がわかるようにしていきたい、とされていたのであります。

インターネットの発達により、情報の入手や発信の様相が変わってまいりました。記念館がこれとどう取組むか、今後の課題であります。内藤さんの意見も知りたかったと思います。

また、20年も前から言われていた記念館前の道路拡張工事が、いよいよ実行されるようです。内藤さんも理事長として随分気にされていたようですが、道路が完成すれば、周囲の様子も変わることでしょう。米山記念館もその存在の意義が益々重なることと思ひます。内藤さんに続く方々の活躍をどうか天国からお守り下さい。



## 故内藤先生の思い出

第2620地区 富士吉田R.C. 前田耕一

内藤先生をしのぶ文章を書くにあたり、まずは正確な資料を欲しくご遺族から著作関係の書籍類をお借りしました。大きなバックいっぱいあります。先生は、生業であるお医者様として地元や県に多大な貢献をされたのみならず、その他の分野におきましても、とても傍らとは思えないほどの意義あるお仕事をされてこられました。そのいづれにおいても、我々凡百ではとても及びも付かない立派な成果を上げられ、こんな先生に、今更ながら改めて心より畏敬と哀悼の念が湧き出るのであります。

先生の各方面へ向けられた造詣の広さと深さは、多くの人々の知るところであります。また、新聞等に掲載された追悼の文章も先生のお仕事の内容が細かく書かれ、それに対する素晴らしい賞賛に大部分が費やされております。更に私が同じことを書くことに愚を感じ、先生のおそばで親しくご指導頂いた私としては、もっと先生の日常的なことを書くことが使命ではなかろうかと考えました。

先生の私生活で、どなたでも思い出されることは、大変お酒がお好きだったことと、かなりお強いやうなことでしょう。日本酒がお好きで、中でも好まれたのは冷酒でありました。先生が地区ガバナーをされておられたとき、運転手として各地のクラブを訪問させて頂きましたが、お酒の席になりますと黙っていても必ずよく冷えた日本酒が先生の宴席に並べられました。目を細めて美味しく喉に流し込まれ、とても満足そうなお顔をされました。そして必ずお酒の品定めをされましたが、先生の評価はたいへん美しい言葉で褒められることが多かった様に覚えております。本当にお酒がお好きだったことがよく分かります。

いつも驚くことは、先生は大変ご健健で、毎日夜遅くまでお仕事をされておいでになったことでした。医師の仕事をされる傍ら、環境保護やロータリー活動、地元の文化活動に携わり、ご自身も執筆活動をされ、尚かつ後進の指導まで、まさに八面六臂のご活躍でありました。ご一統したあるお酒の席で、先生のお仕事の時間配分について伺っ

たことがありました。相手を必要としない執筆のお仕事については、お話を楽しんだその後で、ご自宅に帰られてから夜中まで机に向かわれたそうでありました。物を書くことに至上の喜びを感じておられたのでしょうか。



敬服するのは先生の記憶力の良さとその引き出しの多さです。お話を聞いていると、あらゆる時代の人名、ジャンル、その時代背景がさきさき勉強されたかの様に即座に先生のお口から出てきます。健忘症を患って合っている昨今の我々にはどんな風に見えたのでしょうか。

そんなお元気だった先生が、この何年かの間に劇明の間をさまよう様な大きな病気を二回繰り返されました。運良く、暫くすると二回とも以前に変わらぬほどに回復され、お元気な姿を我々に見せて下さいました。しかし昨年11月末に再々度入院をされてしまいました。今回も向こうのお花畑を遠くから眺めたら、きっとまたこちらに帰ってこられると、誰もがそんな様な気がしておりました。しかし今回は、新田次郎先生や藤原てい先生達を困らせたお花畑での賑やかな宴に誘われ、その誘惑に捕らわれてしまわれたのでしょうか。帰らぬ人となられてしまいました。

先生のおそばで接していた者は、叶わぬながら何時も先生を目標として、奮起することもなく元気にこれからの人生を有意義に送りたいと念じておりました。大きな柱を失い、私共のクラブも、物理的・精神的に大いなる悲しみの中におります。

先生のご冥福をお祈りしつつ——合掌。



# 秋季例祭

- 日時 2007年9月15日
- 会場 朝米山梅吉記念館

## ●記念式典 ●記念行事

創立記念祭講演  
講演

演題 「パーミヤンの仏教美術」

講師 静岡県立美術館館長 宮治 昭 氏

## ●アトラクション

音楽会 ヴァイオリンとピアノ演奏

ヴァイオリン 鍋倉郁子 氏

ピアノ 杉浦美草 氏

## ●懇親会

平成19年9月15日、恒例の秋季例祭が開催されました。公益法人法の改正に伴い、財団法人の事業を、広く一般の方々にも開放するという事で、今回、初めて民間の宮治昭氏を講師に招きました。静岡県立美術館館長の宮治氏の講演は、ご専門である「パーミヤンの仏教美術」と題し、地元2620地区のロータリアンは勿論のこと、神奈川や遠くは神戸垂水RCのメンバー、長泉町、三島市、沼津市など近隣の一般参加者、合計150名の出席をいただきました。

パーミヤンとは、「光輝く」という意味をもつペルシャ語ではないかと考えられています。それを象徴するかのよう、その昔、アフガニスタンはローマ世界と並んでガンダーラ美術が栄えた所でした。ここは、文明の十字路であり、古代遺跡の宝庫でした。同時に歴史的、文化的、宗教的に入り組んでおり、大國の狭間で翻弄さ



れてきた所でもあります。パーミヤンは、2001年のタリバンによる大仏の破壊により、世界的に大きな注目を浴びました。専門家の間では、1920年頃から、古代遺跡への関心が高まり、まずフランスが調査を開始。その後、日・英・米・独などが発掘を始めました。宮治氏は、大学院在学中の1969年頃から、興味を抱き、研究を続けてこられました。パーミヤンは2500mの高さの山の中にあります。ここに700以上の石窟寺院や、東西2つの大仏が存在します。中央アジアの遊牧民は文字を持たないため、歴史的な文獻は存在しません。わずかに玄奘三蔵と慧超の記録が残っているの

みです。それらの記録と、最近の研究によれば、これらの仏像や遺跡は、5世紀半ば～9世紀半ば位に作られたものと考えられています。そしてこの地は、広く国王から庶民まで仏教信仰が篤く、たくさんあるお堂では、修行やお参りが盛んに行われていたようです。

東大仏は高さ38m。この天井壁画は、太陽神を表していると考えられています。太陽神は人の魂を運ぶといわれ、単なる守護神ではなく仏教と結びつけたのではないかと考えられ、ペルシャの太陽神の影響が見られます。

一方、西大仏は55mと東大仏より大きく、東大仏から50年ほど遅れて作られたと考えられています。その壁面に描かれている弥勒菩薩は、インドの仏像に似ています。首と腰をひねる三曲法のその姿は、ボリューム感がよく、剛取りもはっきりつけられ、官能的なものになっています。

お釈迦様没後500年を経て、ガンダーラで仏像が作られ始めました。仏教の核心的な思想は無とか空です。これはイスラム原理主義などと正反対で、他に対してなんでも開かれていて、なんでも受け入れるシステムです。

ですから仏教発祥のインドはもちろんのこと、ギリシャやペルシャの神像も仏教の守り手として取り込まれています。実際、日本においてもお釈迦様、観音様、薬師如来、仁王様など様々な像を見ることができます。こうしてみると、仏教は不思議な宗教であり、これがアジアに広がった大きな理由の一つだそう



パーミヤン全景

です。ただし、無制限ではなく、仏教としての思想がしっかりと存在し、その中に他のものを取り込んできたともいえるようです。パーミヤンの遺跡も、私たちに仏教の懐の深さを、改めて教えてくれるものでした。同時に、こんな山の中にこれだけのものを築き上げた、先人の歴史的遺産を通して、人間の可能性の大きさも見せてくれたような気がします。

この講演会は、県立美術館で開催される「ガンダーラ美術とパーミヤン遺跡展」に先駆けて行わ



西大仏破壊前



西大仏破壊後

れました。参加者は、展覧会より一足早くこの展覧会の一隅に触れることができたのでした。たくさんのスライドを見ながらの解説に、大きく頷きながら、また時には残された仏像や壁面の美しさに感嘆し、しばしパーミヤンへの時空の旅を楽しみました。

講演会の後は、鍋倉郁子さん(ヴァイオリン)と杉浦美草さん(ピアノ)によるミニコンサートが開催されました。宵待草、からたちの花など、なじみのメロディーにしばし酔いました。

引き続いての懇親会は、遠方からのお客様も交えて、楽しい歓談の和が広がりました。



## 米山梅吉記念館理事に就任して



私のガバナー年度の終了間際に、第2570地区より第2710地区から、米山記念館の理事を選出するようとの依頼を受けた。

早速地区内に踏ったが、色々話し合いの末に直前ガバナーがその役を引き受けざるを得なくなった。当地区の西村P氏が評議員に選出されており、私の役目も記念館運営のために、地区よりの資金集めに協力することであろうと考えたのである。

ともあれ、GE時代よりガバナーの期間を通じ、米山記念奨学会の目的の有意義なことは充分理解して、その寄付促進に鋭意努力して来たが、肝心の記念館のことについて詳しい知識をもっておらず、特に私の居住する広島からは遠い存在であった。即ち、ガバナー関係の会合で上京する時の、のぞみ号を利用するため、三島駅は通過駅であり、米山記念館は訪れにくい存在であった。また、静岡県駿東郡長泉町という地名を説きただけで、三島駅より離れたところにあるのではと推測していた。この点からも新任理事として理事会への出席は、記念館を見学するという特別な期待もあった。かくて名古屋駅よりこだま号に乗り換え、三島駅で降り、タクシーをひろってみれば5分くらいで記念館に到着。麗麗な建物と立派な駐車場があるのには驚いた次第。

総会は評議員と理事、併せて20数名の出席があり、新任の理事は2名であったと思うが、新任理事の紹介もないままに会議が終了しそうなだったので、私はすかさず自己紹介のチャンスを与えて頂いた。

次いで協議事項に移ったが、米山家旧長屋門が道路拡張のため、撤去せざるを得なくなり、その保存方法についての討論がメインテーマであった。米山家より何らかの形で記録すべき方法を考えるか(補強に難あり)、写真保存かなどの案が出されていたが、私は徳島県鳴門市の大塚美術館が世

第2710地区  
広島北RC 岩森 茂

界の名画を陶板保存(セラミック)しているのが有名なので、長期保存の面から有利であることを発言しておいた。

何れにしろ、記念館は静かな環境にあり、見学に値するものであることを改めて認識したが、やはりアクセスに難があり、せめてひかり号の停車駅になればとの感を抱いた。

さて、広島から選出された理事として、どうしてもロータリアンの皆様に記憶に残してもらいたことがある。それは広島が生んだ大正時代の加藤友三郎首相と米山梅吉翁との関係である。加藤友三郎の記念銅像が、第二次世界大戦中に金属供出のため、国に徴収された経緯がある。今、広島では改めて銅像復元することになっており、出来上がった時点で写真を持って行き、加藤・米山両氏の銅像対面が出来ればと願っている。その意味からも両者の忘れてはならない因縁について言及しておきたいと思う。



加藤友三郎

私が理事にならなければ、この点を拾い上げることは出来なかったかもしれないが、『超我の人米山梅吉の遺言』という米山記念館創立35周年記念誌を読んでいる中に、米山梅吉翁と加藤友三郎との間に緊密な接点があることを知ったのである(31-32頁)。加藤友三郎翁に関する著書、記述も少なからず存在するが、これらの中には米山梅吉翁の名前は見つけることは出来ない。

因みに米山梅吉の生涯は1868年(慶応4年)江戸に生れ、1946年(昭和21年)逝去。加藤友三郎は1861年(文久元年)広島に生れ、1923年(大正12年)逝去しているが、この間米山は大正10年11月、加藤友三郎海軍大臣を主席全権とするワシントン軍縮会議の出席に併せて、英米訪問実業団に



ワシントン会議

加わり(団長 團琢磨)、まず米国に渡った。奇しくも加藤友三郎らの全権団と同じ船で行くことにしたことになり、米山らは実業団の目的の一つに、ワシントン軍縮会議の広漫的な色彩もあったと取りざたされている。形の上の目的は、英米先進国の経済界、特に米英実業家と肝煎相照らし、誤解をとりて共同して世界平和に貢献することにあつた。加藤友三郎と米山梅吉は東京駅出発時に握手していることも伝記に記されている。事実、加藤全権団長は米英の軍縮縮小案、即ち海軍力を5・5・3とする案を、世界の平和のために受け入れたのである。米英は歓迎した。加藤友三郎には時代を見る大きな考慮



主の舟りを待つ台座

があり、国防は国力に応じた武力を備えると同時に、国力を涵養し、一方外交手段により戦争を避けることが、国防の本義と信じ、国防は軍人の占有物に非ずとの結論を導いていたのである。

さて、米山記念館を訪れ、理事の一人として参画することになったロータリアンの一人として、米山梅吉翁の過去を想ふにあたって、同じ時代に生き、日本国の命運をになってアメリカに渡った加藤友三郎と英米訪問実業団として、同船で渡米した米山梅吉ら一行と因縁浅からざるものがあり、やがて広島に建立される故加藤友三郎翁と米山梅吉翁の銅像は広島に於いて、改めて対面がよいのではないかとこのロマンに夢を膨らませながら、私の寄稿を終える。

## 第2570地区と石川家の人々

第2570地区  
志木RC 浅田 光二

私どもの属する第2570地区は、1951年11月に東京クラブをスポンサーとして創立された川越RCを祖とします。その創立の時期から見て、同じ県内の現2770地区を含めて、埼玉県内の最古のロータリーは戦後生まれであったことから、1920年にわが国初めての東京RCを創立され、1946年に亡くなられた米山梅吉先生とは、直接ロータリーにおいてのつながりを持つクラブは残念ながら当地区には存在しないこととなります。しかしながら、米山先生が三井合名、三井銀行、三井信託、三井報恩会を始めとして、青

山学院とのご関係、その他広い分野でのご活躍から察するに、米山先生のご生前中に、当地区内のロータリアンのご先祖の方との何かのご縁での関わりがあったのではなからうか、という考えを持つようになりました。

時あたかも、今年度当地区は入間RCの石川嘉彦氏をガバナーに迎えました。『ロータリーの友』(2007年7月号)の「ガバナー紹介」にも記述されていますが、石川ガバナーの生家は、早くから入間市(旧埼玉縣入間郡豊岡町)に養蚕業の一大拠点を築き、石川組製絲所(1894年創



業)として、あまねく天下に知られた名家であります。特に本家の石川幾太郎氏(1879年生まれ)は、製糸場の経営に当たっては、その当時は、手織りの製糸が多く行われていましたが、蒸気による製糸機械をとりいれて近隣の農村から女工さんを募集し、本格的な製糸工業を起しました。さらに後年、県内最初に市政を施行することになる川越町にも、当時としては大規模な工場を建設しました。

幾太郎氏は、敬虔なクリスチャンであり、女工さんをととても大切にしていたことでも知られていました。当時は『女工哀史』が話題とされる時代で、一般には低賃金と劣悪な労働条件が



石川製絲所本店工場全景

普通とされていた時代でしたが、石川製絲では福利厚生設備も充実していて、入間市(当時は豊岡町)でも、川越市でも、今もその名を知る人は少なくありません。かく申す筆者も母の生家が川越市の石川製絲場の近くにあり、市内の代表的な企業の一つであった史実を知るもの一人であります。

さて前置きが長くなりましたが、ここで話を本筋に戻したいと思います。

この石川家は、本家石川幾太郎氏が株式会社石川組製絲所の社長となり、弟の龍藏氏が副社長となってシルクの貿易業務拡大を図ったわけ

です。トップの相談の結果、当時一族の中で実業界に身をおかず、青山教会の牧師をしていた石川和助氏という人がおられ、そのご子息で青山学院出身の石川東洋氏(1894年生まれ)が三井銀行に入社していたが、頼望されて銀行を辞しニューヨークにわたり、シルクの質



石川龍藏と石川東洋

易に携わることとなりました。

このように、石川家では一族が一致団結して、国家的見地から、有用な企業を興し育てて繁栄を続けています。当時、青山教会の牧師石川和助氏の牧会に熱心に出発しておられたのが米山梅吉先生の春子夫人であり、和助牧師のご子息東洋氏の青山学院卒業後の就職に関して、夫人の手引きで米山梅吉先生の知遇を得、お眼鏡にかなって東洋氏の三井銀行入社が実現したといわれます。

戦争と敗戦による無条件降伏という長いトンネルを抜け出して、ようやく国際ロータリー第60地区として全国1地区で再承認を得た東京クラブが、隣接する埼玉県にロータリーを創立するよう呼びかけがあったのは、昭和25年秋のことであり、第60地区ガバナー小林雅一氏(内外編物)から、当時高級ストックキングの製造を営んでいた石川東洋氏への呼びかけであったと資料は伝えておりますので、米山梅吉先生が亡くなられて4年も経っているのに、やはり石川東洋氏との不思議なご縁があったのかと思います。

ちなみに川越RCは初代会長伊藤長三郎氏、副会長は石川秀夫氏、初代幹事石川東洋氏でありました。副会長の石川秀夫氏もまた長く川越の石川製絲所の経営に携わった人であり、今も一族の結びつきは強固なものがあります。また「石川会」という組織もあって、折節の会合も持たれ、先頃にはご一族の人たちの機関紙『石川家の人々』という小冊子も発行されたとのことでした。また先にも記述しました当地区現ガバナーを始めとして、川越RC、その他のロータリアンにも石川会につながる方が在籍しておられるようです。

戦後生まれのクラブばかりの第2570地区にも米山先生とのご縁を持つ人がおられることを発見し、良い感じになりました。



石川家の人々

## 青雲のひとみを富士に黄瀬若葉——笈斗献



第2760地区  
内藤 R C 内藤 淳

昨年の夏頃であったと思います。同じクラブの会員中村重剛さんから、米山梅吉記念館に行ってきました、と言っ

て撮って来られた写真を頂きました。その中に、亡き父が1962-1963年度第360地区(静岡、長野、愛知、富山、石川、岐阜、三重の各県、80クラブ)ガバナー時代に米山梅吉翁を偲んで詠んだ父の筆跡の句碑が写っていました。早速、父が折に触れ書き留めていた記録を調べましたところ、次のようなものを見つけました。

昭和39年2月27日付東海新聞からの切り抜きが貼ってありました。これによると、この句碑は、当時の沼津北ロータリークラブ小林会長と米山梅吉翁三男米山桂三慶應義塾大学教授のお二人に父が依頼されて建てられたものであることが分かりました。そして、父の自筆で米山翁の墓地に建つ句碑の表は

青雲の瞳を富士に黄瀬若葉 笈斗献  
昭和三十八年四月

とありました。「瞳」はこの句碑では「ひとみ」となっています。この記録帳に貼ってある句碑の裏面の写真によるとそこに刻まれている文言は日本のロータリーの偉大な先覚者米山梅吉翁が未だ若葉の夢も暮らさぬ頃、幾度か黄瀬川の史跡に立ちて輝く巖を雲峰富士に凝し高く清くゆるぎなき魂をねり養われけん英姿を墓前に翳きて思うかぶまゝに

昭和三十八年秋  
国際ロータリー三六〇区ガバナー  
笈斗 内藤重三郎

であります。

この句碑に対する米山桂三氏から父宛の礼状も保存してありました。個人の私信をそのまま記すことは気が引けますが、句碑建設の歴史の一環を紹介するので、お許し頂けるもの

としてその一部分を写させていただきます。

Dear Sirs:

It was our great honor that a monument, Mr. Naito's affectionate Haiku inscribed, was erected in the memory of the late Umekichi Yoneyama.

The name of our family, added grace by the monument, shall last forever with our family cemetery which has been in existence over three hundred years.

さて、中村さんと句碑について話をしているうちに、私はまだ米山梅吉記念館に行ったことがない、と申しましたところ、案内しましょう、と言うことになり、10月21日に同じクラブの会員奥瀬勇作さんを誘い、中村さんの奥様も同行して頂き、4人で中村さんの自動車で8時に岡崎を出発することになりました。

記念館では、先ず、訪問年月日、氏名、所属を記載しました。各地からロータリアンが来訪していらっしゃることに驚き、そのなかに岡崎ロータリークラブと記載できたことを嬉しく思いました。そして、早速、父の句碑を見に行き、米山梅吉翁の句碑に並べて建てられているのを見つけました。平成6年には米山記念館で句碑の説明板を傍らに立て、その文中に「黄瀬若葉は、源九郎義経の故事を思い出してきた言葉であろう」と書いて下さいました。物理学を修めたが日本歴史にも興味を持っていた父は、泉下でさぞ喜んでいただろう、と思ひ、関係者の皆様のご配慮に感激しました。館内は2階が展示室になっていて、米山梅吉翁の経歴、翁が用いた調度品や自筆の書、日本ロータリーの足跡などが展示してありました。それらを記念館の学芸員市川真理さんが一室一室丁寧に説明して下さい、翁は日本に国際ロータリーの思想を導入されたことは勿論のこと、日本に信託



銀行の考えを導入し、自ら三井信託銀行の初代社長に就任されたり、青山学院に緑岡小学校と同幼稚園を創立して校長に就任されるほか、勸業貴族院議員になられるなど財界、教育界、政界などの広い分野で活動されたことを知りました。更に、翁は社会から頂いた財産は社会に返す、と言う奉仕の精神を実践された人で、例えば青山学院緑岡小学校と同幼稚園は私費を投じて作られたので、奥様は大変苦勞されたそうです、と続けられました。奥様にも光を当てる方法はないものか、と思うかわから、日本には昔から「内助の功」と言う言葉があるが、現代では聞くことが少なくなったな、と思いました。表面に出ることを良しとする現代の風潮ですから根っこが空洞化しそうで心配でなりません。

展示品を見終わって屋上に出了ました。快晴の秋空のもとで麓から頂上まで一望できる雄大な富士山を眺めていましたら、「桜が咲いていたらまさに日本の風景ですね」と言う奥瀬さんの声にわれに返り、父は例の句を4月頃に詠んだことを思い出し、父もこの地で日本の風景を実感したのではないかと、想いを遣らせた。



米山梅吉記念館での感激を胸にして、日が落ちたら5時45分に予定通り拙宅に送って頂きました。中村さんご夫妻と奥瀬さんにはいろいろお世話になりました。83歳を連れての長旅でご苦勞をおかけしました。

以上は私の手元にある資料をもとにした米山梅吉記念館訪問記であります。父がそれまで面識のなかった小林沼津北ロータリークラブ元会長および米山桂三氏に何時何処で出会ったのか、判然としませんでした。これを知りたいと思いました。桂三氏は既に故人となられましたので、沼津北ロータリークラブ事務局に問い合わせの手紙を書きました。同クラブでは資料

がないし当時を知る人もいない、と言うことで記念館に私の依頼を伝えて下さいました。記念館から頂いた手紙には「第360地区では、記念館で行う春秋の例祭にガバナーが参加するのが恒例になっていましたようです」と書いてありました。父の記録帳にも翁の句碑を扶んで、当時の沼津北ロータリークラブ小林会長と父とが写っている写真があります。



内藤卯三郎氏(左)と小林沼津北RC元会長(右端)

この写真はその前後の写真から昭和38年4月の翁の命日に撮影したものと判断できます。また、翁の奥様は既になく、長男と二男は夭折されていますから、例祭には三男である桂三氏が出席されていたと考えられます。このことから、昭和38年の春の例祭のとき、父にこのお二人との出会いがあったと思います。そのとき、この手紙に書いてあるように父は翁を偲んだ上記の俳句を披露し、句碑にと言う話になったのではないのでしょうか。更に、この手紙には「当時の当館理事長松井謙一と共に、句碑に使う石を黄瀬川に運びに行ったようです」とあります。父は嘗て石に凝り族先の川原で気に入った石を探し回ったことがありましたから、松井氏と共に黄瀬川に石を運びに行ったであろうことは十分に頷けることです。このような過程を経て父の句碑は建てられたと思います。

句碑建設に関する資料収集に対し米山梅吉記念館および沼津北ロータリークラブの各事務局にはご協力頂きまして有難うございました。

最後になりましたが、この拙文を書く機会を与えて下さいました米山梅吉記念館の方々に厚くお礼を申し上げます。

## 米山梅吉と『実業之日本』補遺

35周年記念誌編集委員長

井口 賢明

(沼津北RC)

前号(Vol.10)で、米山梅吉の「新徳居論」が『実業之日本』に掲載されていることを書いた。この補遺には、他に米山の文章や米山に関する記事が数多く掲載されている。前号では、紙数の関係でその具体的内容に触れることができなかった。

これらを記録に留めたいと思い、その補遺という形で記してみた。なお、『実業之日本』全てを網羅したつもりであるが、見落とししたものがあるかもしれない。

掲載されたものは、末尾のとおりである。米山の文章と米山に関するものに分けて、若干のコメントをしてみる。

### I 米山の文章、発言に関するもの

◎№1の「米國第一流人物の品格は四大基礎の上に立つ」

米山の文章で最初のものである。『実業之日本』は、月2回の発行であるが、概ね春、秋に特集の増刊をしていた。明治44年10月の秋季増刊が「常識」という特集であった。米山は、米國育才ということで、アメリカ人の常識観を書く。

米山は、常識とは健全なる判断だという、アングロサクソンとくにアメリカ人は、常識が発達しているとして、その理由をいくつか挙げる。

ちなみに、米山に『常識開門』という書物がある。昭和12年1月の発行である。米山のいう常識とは、万人が常識とするところが常識であるというように説める。疑問答のようで答にならないが、ごく平易に書かれている。

◎№2の「肥後人の長所と短所」

一連のシリーズの中の肥後人ということであるが、米山が何故このような題名について、指名を受けたのかかわからない。短い文章である。他に、山路愛山、安田善八郎の文章がある。

◎№3の「初対面の就職希望者から聞かれた私の最も嫌いな返答」

就職に際し、採用者と人を送りだす学校とは見方が違う。卒業生を紹介する学校に対し、教師はもっと生徒の人物を知って欲しいと、注文をつける。私の一番嫌う返答の例として、「官僚になるつも

りだったが、収入の上から実業界に入ってみる気になった。」ということをおける。私の最も喜んだ返答の例として、「最初から実業界に入って何でもいからやる決心であった。」という答えであるとする。しかし、最初から実業界に入る積りで、予め銀行員になる決心だったというのは今一だという。何でもやる決心であれば、どんな仕事をあてがわれても忍耐もし、勉強するからだという。

苦い薬を飲む覚悟で就職せよ、職業に嫌気がきたらこう思へ、方針は幾度変えてもよい、ということもいう。

◎№4の「注意せば立話からでも意外の獲物がある」

秋季増刊の此機会という特集号である。この号もそうそうたる人物が執筆をしている。

米山は、人が出会う機会に三つあるとして、次のようにいう。一つは所謂千載一遇の好機会で、風雲に際会したいろいろな人物が現れて来て功業を建てる、歴史上に一時を刻するやうな大革命とか大戦争とかいうような時である。二つ目はその人の一世一代の幸不幸の分岐点ともなるべき生涯に一度しか来ないというやうな大切な機会である。三つ目は日常身辺に一杯起る千種万様の小機会である。

当然のことながら、第三の機会が重要である。これを疎かにしてはならないという。そのような見逃されがちな機会を得るために絶えず注意していなければならない。そうすれば自ずと向こうからチャンスが飛び込んでくるというわけである。

◎№5の「新徳居論」

これは前号で詳しく触れた。

◎№6の「最も有効なる應對談話法の真髓」

秋季増刊の「有効生活」という特集号である。談話と應對は別のものであるが、その実は一つである。談話は思慮であって、應對は身振りであるといえる。談話のみが巧妙であっても、應對が上手でなければ相手に感動を与えることができない、という。

以下に説くところは、なるほどと感心させられるところがある。例えば、「聡明な人は小声で話す」「大勢の人のいる会合では、重要な話はしない方がよい」とか、「ある特定の人を独り占めしてはならない」とか。

◎№7の「下級社員は尊敬をあげよ」

物価の騰貴と俸給のあげ方という問に対する答えである。執筆というより、談話である。

◎№8の「小卒卒業生より行員を作る」

我が社で社員を採用するにはという設問に対す



るものである。大學、高等商業學校、商業學校を卒業した者の外、小学校を卒業した者も練習生として採用し、その後試験をして、行員とするが、決して色と遜色がない。

◎№9の「歐米の交戦國民は如何に日本を觀るか」  
春季増刊の「列國監視の日本」という特集号である。「最近米國に遊び列強國民に接しての所感」である。

大正6年10月、日賀田純太郎を委員長とする政府特派財政經濟委員としてアメリカに渡った。そのときの感想、所感である。歐米人は、今回の第一次大戦の日本の態度に注目している。日本の親善は今最高潮であるが、支那の問題について、もっとアメリカと強固な関係を築かなければならない。また、これからの日本が世界の強國として立つには國民の修養が必要である。このようなこという。◎№10の「支那より歸りて」

米山は、大正7年10月、團琢磨と支那旅行に出かけた。そのときの感想である。この支那旅行のことについて、米山の直接の文章はあまり見あたらない。記録的なものより、感想の部分が多いが、このときの支那旅行のままとった文章としては初めて見る。

◎№11、12の「所謂總務取締役會社の新機軸と事業會社の幹部組織法」「總務の定款改正に對する余の批判及び新提案」

總務取締役會社が定款を変更して、社長、専務取締役は、少なくとも5年以上会社の事務に従事した者でなければならないとすることに對する意見である。

米山は、資本を代表する経営者としての取締役と事務を執行する重役とを分けることは結構なことだとする。一方で、親流的に、取締役をその会社の事務に5年以上従事したものに限るとするのはどうかという。

今、取締役の他に執行役員を置いている会社が多くなったが、アメリカでは当時もそのようなことが行われていて、これを参考とした意見である。◎№13の「華盛頓會議は實に經濟會議たらざるべからず」

華盛頓會議參與者及び觀察者の帰朝報告である。團琢磨を團長とする英米訪問日本実業団が大正10年10月、アメリカ、イギリスに渡った。米山は、アメリカだけであったがこの団に加わった。アメリカ、ワシントンでは、第一次大戦後の修繕を目の当たりにして、今後の軍縮を取決めようとする會議が開かれていた。英米訪問日本実業団は、これをも横目に觀んだものではあった。

米山は、真に軍縮論者が徹底し、財政上各国の出賣の減少が見られるようになる時、初めて世界の經濟的回復が全てられ、そうすれば經濟會議がもたれ、經濟的に世界の平和安定が計られるようになる、という思いをのべる。

◎№14の「目的達成に必要な應對ぶり」

目的達成号という特集である。日本人はとかくわきを見て話す風があるが、相手の目を見て話さなければならぬという、当然のことであるが、戒めをいう。◎№16、17の「財界巨頭漫談會」  
内容的には難しいものではなく、趣味、健康法、思い出話などの漫談會である。

## Ⅱ 米山梅吉に関する論評のもの

◎№1、2、3、7、8、9、11、13、14は、いずれもごく短い論評のものである。

№1は、声が大ききことで、三井銀行の大御所中上川彦次郎の目にとまり、出世していったという。№2は、学問も大きな関心のない無縁の一番生の栄進をいう。№14は、米山をモダンボーイだというのが、それは年のことではなく、心持ち、仕事ぶりが近代化だからという。

◎№4、5、6は、当時の三井銀行の常務早川千吉郎、池田成彬、米山の三人を主に取り上げるものである。

◎№10は、三井信託の創立のいきさつにも触れる。そして、この会社は、事業内容について、米山の長年の夢であったというだけでなく、組織面においても、米山の持論（1№11、12）を実現したものであるという。すなわち、米山は、資本の代表たる取締役と事業執行者を分けるというのであるが、取締役には、三井関係の人物だけでなく、三井、安田などの関係者も入る。この人達はいわば社外取締役である。これに対し、事業を担当するのは、社長の米山以下副社長であるが、このうち取締役は、米山1人で、あとのいわゆる重役は取締役ではない。ちなみに、昭和4年ころ、副社長が7人いた。

◎№12は、7頁にわたる長文で、米山を絶賛する文章である。筆者は、「卓然時流を倣却し、親中の



邊にも似たる清き美しい品性を有し、高格たる人の典雅な風采の持主だともいう。

米山の幼少時のことの記事に、実方の和田家が長原町にあるなど誤りが見られるが、米山が余り自分のことを書いていないなか、米山の生い立ち、その後の栄達の過程などについて、参考になる。

この筆者は、米山の昇進出世について、他の人格者の典型、だとする。そして、温厚寛実にして他に、高潔なる人格、明晰なる頭腦、透徹せる判断力、誘惑を拒絶し得る意思の力、難難を凌破する忍耐力、なかならず高潔雪の如き人格と玲瓏玉の如き麗しい人情美であるとし、米山を絶賛する。

## Ⅰ 米山梅吉の文章、発言に関するもの

No	題 名	筆者(刊名)	巻 号	発 行 日	特 集 号
1	英國第一人物の信條は列強諸國の上に立つ	米山梅吉	3	昭和4.10.10	秋季増刊・交談号
2	肥後人の長所と短所	米山梅吉	4	大02.08.15	
3	秋野語の就職希望者から見た私の高も嫌ひな話	米山梅吉	4	大02.10.01	
4	はなせば立派からも意外の面がある	米山梅吉	4	大02.10.10	秋季増刊・此機會
5	新聞印刷	米山梅吉	4	大03.08.15	
6	最も有難なる應酬部員の話	米山梅吉	4	大05.10.10	秋季増刊・有給生活
7	下敷社長は神助をあげよ	米山梅吉	4	大06.02.01	特集の増刊と神助のあげよ
8	小卒卒業生より行員を告る	米山梅吉	4	大06.04.15	
9	歐米の交戦國民は如何に日本を觀るか	米山梅吉	4	大07.04.10	春季増刊・列強監視の日本
10	支那より歸りて	米山梅吉	4	大08.02.01	
11	所謂總務取締役會社の新機軸と事業會社の幹部組織法	米山梅吉	4	大10.08.01	
12	總務の定款改正に對する余の批判及び新提案	米山梅吉	4	大10.10.01	秋季増刊・見聞録選評号
13	華盛頓會議は實に經濟會議たらざるべからず	米山梅吉	4	大11.02.15	
14	目的達成に必要な應對ぶり	米山梅吉	三井信託社長	大13.10.01	目的達成号
15	青年の就職願と其解決案	米山梅吉	4	大15.02.01	
16	財界巨頭漫談會 1	米山梅吉	4	昭和9.01.01	
17	財界巨頭漫談會 2	米山梅吉	4	昭和9.01.15	
18	現代青年と獨立心	米山梅吉	三井信託會長	昭和10.10.01	
19	客と紳	米山梅吉	三井信託會長	昭和13.06.01	

## Ⅱ 米山梅吉に関する論評のもの

No	題 名	筆者	巻 号	発 行 日	特 集 号
1	早稲の平筆		14	昭和44.09.01	
2	世評の人物		16	大02.10.10	秋季増刊・此機會
3	高橋神の好い言葉		17	大03.02.15	
4	三井銀行の首領人物	楚木生	17	大03.04.01	
5	三井銀行の首領人物(二)	楚木生	17	大03.04.15	
6	三井銀行の首領人物(三)	楚木生	17	大03.05.01	
7	當世山道の早い言葉	天植生	19	大05.01.01	25人
8	秋野語	岡本一平	20	大06.01.01	
9	英國第一の貴族家		22	大08.02.01	秋野語・東京新聞号
10	三井信託と其經營者	楚木生	27	大13.05.15	
11	財界巨頭漫談會	藤人生	27	大13.11.01	17人
12	首しを學校から信託工となった米山梅吉氏對談	五十神生	30	昭和42.02.01	
13	新年生れの貴族家	藤村生	31	昭和43.01.01	秋野語選評号
14	部下で讀いた話		31	昭和43.05.01	三井信託が讀んで讀いた話

## 館展示の米山翁縁の品

このポール・ハリスの自伝は、ポール存命中の1928年(昭和3)に出版された。米山がポール本人から贈呈されたものを、米山が翻訳したものである。ロータリーが誕生して20余年で、その創設者の自伝が出版されるということは、ポール、ひいてはロータリーがそれだけ関心を持たれる組織として、世間の注目を浴びていた証しであろう。

ここでは、どちらかといえば劣等生であったポールが、自らの来し方を回想し、様々な職業を経てロータリーを作るまでが描かれている。

シカゴでの初期のロータリーの精神は、時に利己的と評されることもあったという。実際、新会員の勧誘が、会員相互の職業上の利益を基調にしていたというのである。けれども、それ以上にロータリーの主たる思想が「与えること」と「友誼」であったからこそ、その活動は世界に広がり、100年を経た今でも続いているといえるのであろう。

## KEEP YOUR NAME CLEAN

この名刺入れは、米山が三井信託株式会社社長時代にポケットマネーで作り、新入社員の入社祝いに配布したものである。信託の世界に入った若人に渡された名刺入れは、三井信託の社は「奉仕と開拓」と共に、信託マンとしての姿勢を示していた。

当初、この文言はKEEP THY NAME CLEANとなっていたそうである。聖書の一節、Our Father which art in heaven, Hallowed be thy name.(天国にいる私たちの父よ、あなたの名前が神聖なものとしてあがめられますよう)からヒントを得たものであろうか。THYという単語はYOURの古語で、あえて日本語にするなら「汝の名を汚すなかれ」となるうか。伊達男米山らしいが、さすがに本人もこれは気障だと感じたのか、YOURになったという。

先日、関西の広告代理店から、ある会社がこの文言を自社の広告で使いたい、という連絡があった。企業倫理が問われる時今、この文言があらためて見直されている。



## ご寄付のお願い

今年度前半(平成19年7月~12月)の寄付入金状況は別表のようになっております。

今期は、特に賛助会員増員に力をいれています。現在、この館報は各クラブに1部ずつしか頒布できていないのが現状です。当館の日曜は、館報が会員お一人お一人に渡り、ロータリーの友のように、会員皆様の交流の場となることです。賛助会員になっていただきますと、館報を個人約にお送りすることができます。ぜひこの機会に、多くの方に賛助会員になっていただき、継続的なご支援をお願い申し上げます。賛助会費は年間お一人一口3,000円となっております。

●申込先 郵便振替口座番号 00820-4-57730  
加入者名 財団法人 米山梅吉記念館

100円募金地区別表						平成19年7月~12月現在	
地区	地区名	RC	口数	地区	地区名	RC	口数
2500	北海道東部	68	2	2670	愛媛・香川・徳島・高知	74	6
2510	北海道西部	73	3	2680	兵庫	74	10
2520	岩手・宮城	85	3	2690	岡山・鳥取・島根	67	18
2530	福島	66	3	2700	福岡・佐賀・長崎	59	3
2540	秋田	43	3	2710	広島・山口	74	20
2550	栃木	50	2	2720	熊本・大分	77	6
2560	新潟	57	4	2730	鹿児島・宮崎	64	1
2570	埼玉西北	56	5	2740	長崎・佐賀	57	4
2580	東京・神奈川	71	7	2750	東京・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉	91	14
2590	神奈川	62	12	2760	愛知	81	7
2600	長野	57	5	2770	埼玉南東	83	10
2610	富山・石川	65	2	2780	神奈川	71	7
2620	静岡・山梨	82	12	2790	千葉	83	15
2630	岐阜・三重	80	5	2800	山形	55	5
2640	大府府南部・和歌山	74	2	2820	茨城	59	4
2650	福井・滋賀・京都・奈良	96	4	2830	青森	40	1
2660	大府府北部	86	6	2840	群馬	47	4
RC総数		2,327		口数		2150	
						合計金額 2,571,209円	

賛助会費地区別表						平成19年7月~12月現在	
地区	地区名	RC	口数	地区	地区名	RC	口数
2500	北海道東部	68		2670	愛媛・香川・徳島・高知	74	
2510	北海道西部	73		2680	兵庫	74	
2520	岩手・宮城	85	1	2690	岡山・鳥取・島根	67	
2530	福島	66		2700	福岡・佐賀・長崎	59	
2540	秋田	43		2710	広島・山口	74	
2550	栃木	50		2720	熊本・大分	77	
2560	新潟	57		2730	鹿児島・宮崎	64	
2570	埼玉西北	56		2740	長崎・佐賀	57	
2580	東京・神奈川	71		2750	東京・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉	91	
2590	神奈川	62	8	2760	愛知	81	
2600	長野	57	1	2770	埼玉南東	83	1
2610	富山・石川	65		2780	神奈川	71	4
2620	静岡・山梨	82	87	2790	千葉	83	1
2630	岐阜・三重	80		2800	山形	55	
2640	大府府南部・和歌山	74		2820	茨城	59	
2650	福井・滋賀・京都・奈良	96		2830	青森	40	
2660	大府府北部	86	1	2840	群馬	47	
RC総数		2,327		口数		1040	
						合計金額 555,600円	





箱根ラルリック美術館  
LALIQUE MUSEUM HAKONE

19世紀末から20世紀初頭にかけて生きた時代の寵児「ルネ・ラルリック」は自然とジャポニズムをこよなく愛し、アール・ヌーヴォーからアール・デコの2つの時代をリードする華麗なる作品は、今でも世界の宝庫となっている！

美術館のもう一つの人気はオリент急行の専用「コート・ダージュール号」で、ラルリックの室内装飾を堪能しながらディナータイムを楽しむ大人の空間です。



ミュージアム 花園エリア



レストラン セットメニュー



生活雑貨ショップ



1929年製オリент急行

■住所：〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原 箱6-1 ■電話：0460-94-2255 ■ホームページ：http://www.lalique-museum.com

## 米山梅吉記念館のご案内

### 開館時間

午前10時～午後5時（但し11月～3月は  
午後4時まで）

### 休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日  
（5月・8月の特定日）



## 米山梅吉記念館報

Vol. 11

発行日 平成20年3月15日  
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館  
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1  
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
 URL : http://yoneyama-umekichi.jp/  
 e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp  
 印刷 フタバ印刷株式会社